

盂蘭盆（うらぼん）：救いの道にめざめた物語



お仏壇やお墓に向かう方の数が一年でいちばん多いのが、お盆の時期ではないでしょうか。そもそもお盆の始まりは、『仏説盂蘭盆経』というお経にある物語だと言われています。

お釈迦様の高弟の一人に目連尊者という方がいました。目連の母親は既に亡くなっていたのですが、たいへん母想いの目連は、いつも母親のことが忘れられずにいました。

ある日のこと、目連は母親が今どこにいるのかと、神通力で探してみました。すると、こともあろうに餓鬼道に堕ちている母親の姿を発見したのです。生前はとてもやさしかった母が、なぜ餓鬼道に堕ちてしまったのか…。

実はこの母親は、他人から物を取るばかりで、施すということがまったく無かったのです。それは、まだ幼い目連を育てるためでした。「**自分のために母親が餓鬼道に堕ちた**」と知った目連は、なんとか母親を救えないものかと、お釈迦様に尋ねました。

お釈迦様は、「夏安居（げあんご：雨季の間の洞窟や寺院での修行）の最終日（7月15日）に、すべての修行者達に供養をせよ」と勧めました。そこで目連は、供物を盆に盛って仏弟子達にふるまいました。その功德によって、目連尊者の母親は天上界に昇ることができたということです。



この物語を味わうとき、大切なのは、「施しをしなかった母親が餓鬼道に墜ちたこと」ではなく、「それを目連尊者がどう受け止めたかということ」だと、中西智海さん（本願寺派勧学・元相愛大学学長）はおっしゃっています。

「**自分のために餓鬼道に墜ちた**」と気づく、めざめる…。「救いの道」とは、迷いの原因が自分の外にあるのではなく、自分の内（自我に執着した煩惱）にあることにめざめることであります。

目連尊者が尊いのは、仏弟子たちへ供物をふるまったからではなく、母親が餓鬼道に墜ちるという不幸によって、救いの道にめざめたところにあります。

浄土真宗の宗祖・親鸞聖人のお言葉に『**遠く宿縁（しゅくえん）をよろこべ**』とあります。

私たちが結ぶさまざまなご縁には、ありがたいご縁（順縁）もあれば、避けて通りたいご縁（逆縁）もあります。しかしそのいずれも、阿弥陀さまが手を変え品を変えて、私たちを救いの道へとお導きくださるご縁である、という意味です。

皆様も、お盆を機会に、それぞれの「宿縁」に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

